

瑠璃色の空

神野麻郎

海紅豆

リヨリオの検査の日で、皆で山を下り、海岸近くまで出て、橋を渡ってアイランドの病院に行く。

皆というのはリヨリオ、ユズ、ママ、それに私。ママの考えで、時間がせわしいので、ユズは昼前に幼稚園を早退した。それで三人で早めの昼を食べて、一キロほど離れた私の家に車で来て、その車を私が運転してアイランドに行くのだ。アイランドとの間にかかる幅広い道路橋には、いつものように大型トラックやトレーラーが疾駆していた。四角形を少し変形させたかたちの人工島には、貨物船の着くコンテナバースが四面に設けられ、倉庫なども多く、物流の拠点になっている。フェリーターミナルもある。住宅や各種施設、商店やホテルなどのエリアはそれらに囲まれるかたちで島の中ほどを占め、新交通システムが通っている。その街区の一部を占める大きな病院の前でママとリヨリオを下ろした。検査では前もって薬で眠らされるらしいが、昼食の後に車に揺られ、リヨリオはもう舟を漕いでいた。

三カ月前、幼いリヨリオが初めて入院した時には、皆でだいぶ心配した。三月上旬のことで、ちょうど周君と娘の家族は一年ぶりに中国江蘇省の海辺の都市にある周君の実家への旅行を予定し、楽しみにしていた。向こうの親族も心待ちにしていた。しかしその直前にリヨリオが高熱を発し、いつもの風邪などの場合と違って三日も四日も熱が下がらなかった。そのうえ唇や舌が発赤し、身体に発疹も出て、かかりつけの小児科医は川崎病を疑い、その紹介でアイランドの病院で受診した。旅行はもちろんキャンセルせざるをえなかった。

検査の結果やはり川崎病と診断され、それから二週間そのまま入院治療した。まだ二歳になる前では一人にはしておけず、病室にママが二泊すればバッチャ、つまり私の妻が一泊交替するというようにしていつも誰かが付き添った。まだ

あまり自分の気持ちや容態を言葉で表現できないリヨリヨは、時に不機嫌に泣きわめいた。ベッドの上の檻のような仕切りの中で、左手に点滴の管をつけられて不自由に、それでも起きれば本能的に何かをして遊ぼうとする姿は痛々しかった。ふだんはけんか相手でもある姉のユズも、ママやリヨリヨと離れているのは寂しそうで、見舞いに行くたびに泣き顔になってママに抱きつき、収まるとリヨリヨを気づかって遊び相手になってやっていた。

リヨリヨは発病以来一週間たつてようやく熱がとれ、さらに十日間ほど治療を続けてから退院した。けれども川崎病は予後も心臓に冠動脈瘤ができるのが怖いらしく、退院して一カ月目に検査があった。幸い異常はなく、ひとまず家族は安堵した。それからまた二カ月置いて、今日は三カ月目の検査というわけだ。

その三月はちょうど私が四十年余り勤めた会社を退職した月だった。翌月から私はすっかり暇になって、孫たちにかかわる時間も増えた。

二人だけになった私とユズは、山腹にある家までいったん帰ってまたここに取って返すのもあわただしいので、リヨリヨの検査が終わるまで、このアイランドのどこかで遊んでいようということになった。とはいえ私は、この四角い平らな人工島の中にもむしろそうな子供の遊び場所を知らない。少し考えて、アイランドの南の海岸に行ってみることにした。少々暑い日だが、海のそばなら四歳の女の子にも少しは楽しいだろう。

駐車場で車を下りるとすぐ光と熱におそわれた。ユズは白いキャップをかぶり、ママから持たされた小さなリュックを忘れずに背負った。私もいつものハットをかぶり、小さなカバンをたすきにかけた。駐車場の隣の区画は金網のフェンスで囲われた広場で、見るとバーベキューの設備がいくつも並んでいる。休日にはにぎわうのだろうが、今は人かげがない。二人で手をつなぎ、海の方に向かった。すぐ、前方がぎらぎらと輝いた。

「ああ、海だ。船がいる」「フネがいる。……ジッチャはウミ、すきなん?」「ああ、大好きだよ」「ふーん。ユズはウミきらい」「なんで?」「だってこわいもん。およげないもん」

去年の夏、家族で砂浜に泳ぎに行った時、打ち寄せる波を怖がっていた。「ああ、そかー。でもすこし練習したら、泳げるようになるよ」

海岸の公園に出た。人工島の南のへりで、ヤシの木が並び、ベンチや休憩所もある。下は白っぽいレンガを敷き詰めてある。

「ああ、潮のにおいがする」「しおのにおいって、どんなにおい?」「海のおお

い。息をふかあく吸い込んでみ。こんなふうに」「うん、しおのにおい、すこしする、する」

白い熱の光の中で、自由な服装の若い男たちがまばらに座って談笑しているのは、学生たちのようだ。すぐそばにオフィスビルのような校舎が立ち並んでいる。海のへりには釣り人たちの姿も少し見える。

ユズは開けた前方に誘われたように走り出し、段差になったところを下りていく。危なっかしいので、声をかけてすぐ追いかける。急に立ち止まった。足もとにぼよぼよしたものがある。しゃがんで見る。

「これなあに？」「クラゲだね」「なんでこんなところにいるの？」「さあ。釣りの人が網ですくって、ここに放ったのかなあ。もう乾いてきてるよ。あ、さわらない方がいいよ」

また走り出した。海のへりにめぐらされた鉄柵まで行って、柵の間から海面をのぞく。海は土を混ぜたようなにごった色をしている。波はほとんどないが、浮かんだゴミの動きで水が横に流れているのがわかる。

後ろの方に円型の建物があった、人が出入りしている。そばに自動販売機が二台並んでいる。

「あそこで何か飲み物買おか」「どこ？」「あそこ。自動販売機があるよ。ジュースでも飲も」「おカネ、もってるん？」「もってるよ」「うん！」

今度は段差をいくつか上っていく。円型の建物はドアが開いたままの簡易なカフェレストランで、やや小暗い中にはやはり学生たちが多くたまっていた。

「ここ、アイスクリームもあるんだねえ。食べよか？」

ユズは店内のアイスクリームの絵を見上げながら、首を横に振る。ママにクギを刺されてきたようだ。ママは日ごろから甘いものにきびしい。

店から出て自動販売機を見上げる。

「何にする？ 何でもいいよ。ジュースもコーラもあるよ」。また首を振る。

「あまいのはだめって、ママが」「そうか。でも、みな甘そうだなあ。じゃあ、ユズちゃんが少しだけ飲んで、あとはジツチャが飲むことにしようか。少しだけならいいよ」「うん！」「じゃあ、これ入れて。そこそこ」。ユズは手を伸ばしてコインを機械の口に入れる。

結局コーラのペットボトルを一本だけ買った。建物の横の日陰になっている所にいっしょに座る。リュックを脱ぐのを手伝ってやる。

「ユズちゃん、今までにコーラ飲んだことある？」「ない」。黒い液体を少し口に含むと、口をゆがめた。「おいしくない？」「もういい。みず、のむ」とユズ

はそばに置いたリュックを開けて水のボトルを取り出した。

隣の店から学生たちが出ていく。午後の授業が始まるようだ。

沖に大小の船がいくつか浮かんでいる。停まっている船も、動いている船もある。けぶっている中に、対岸の山々の稜線が薄くたどれる。

私は港や公園の景色を左から右へ、右から左へ、ゆっくりながめやる。気分は悪くない。そろそろ退職して三カ月なのだと思う。

辞める時には、これからどういう変化があるのか、自分の身の上ながらよくわからなかった。でも三カ月近くも経つとはつきりしてきたこともある。まず、仕事の算段や人間関係のわずらいから遠ざかると、一日一日が均質になった。自分一人にとっては、平日と休日、週初めと週末といった概念が不要になった。そして日々の衣食住という生活の基本に意識的になった。「衣」はともかく、掃除や食器洗いを引き受け、食料の買い出しや料理などの家事も手伝うようになった。

それにながかに、自然や四季のめぐりがじかに感じられるような気がした。桜が咲き、満開になり、葉桜になる。春が闊けていき、初夏になる。雨が降っては止み、風が吹いては止まる。そんな季節のあたりまえの変化に敏感になった。花や木や鳥も身近になった。子供のころのようによく空を見上げるようになった。それで柄にもなく、下手な俳句を作りはじめた。毎朝の犬の散歩の時に、百円ショップで買ってきた小ぶりのメモ帳を句帳として携える。山の中腹の住宅地に住んでいるので、家から少し歩けば自然観察には困らない。日によって、気分によって、十句できたり、一句もできなかったりした。句帳はだんだん埋まっていくが、でもそれをどうしようというわけでもない。

まわりの自然とともに、人間関係では、家族を以前より身近に感じるようになった。家族との関係を見直し、結び直す、というほどのことではないが、自宅に居続けるようになるとおのずと同居している妻も、歩いて十五分ほど先の団地に暮らしている娘や孫たちも、中国人の夫も、一人一人が以前より大きな存在になり、共に連帯して同じ時を生きているという感じが強まった。反対に、会社関係の人間関係はすみやかに遠ざかっていくようだ。

もう手帳を持ち歩く必要もなくなった。たいてい腕時計さえ必要ない。ネットはよく見るが、新聞はほとんど読まなくなり、テレビもおおよそつまらないのであまり見ない。自分一個のことについては、もう未来に夢や希望も抱かない。その未来はあの海の沖のように、明るい灰色にけぶる等質の時間の流れのように思われる。その果ては闇に続き、そしてその暗黒まではもう遠くないか

もしれないにしても。

また海ぎわに下りた。柵に沿って西の方に戻った。椅子のような、オブジェのような低い石造物がぽつぽつと並んでいる。ユズがおもしろがってその上にかかる。手を取ってやると、笑いながらそれらを飛び石のように渡っていく。身体も、サスペンダーの付いた花柄のスカートも小さい。

西の方にはバスがあるらしく、コンテナが積みあがっている。その上に赤白の縞のガントリークレーンがそびえ、ちょうど大きな船が着岸している。

「あれ、キリンさんみたいだねえ」「どこ？　キリンさん」「あそこ、あれ」「たかいねえ」「高いねえ」「ね、だっこ」「え？」「だっこ」

抱き上げると満足そうに笑う。

キリンさんをながめながら、ユズが幼稚園でこのごろウサギの役を練習しているらしいことを思い出した。

「ユズちゃん、今度、幼稚園の劇でウサギさんやるの？」「そう、ウサギさん。ホンちゃんもウサギさん」「なんの劇なん？」「キンタロウ」「ユズちゃんはウサギさんになりたかったの？」「うーん、ユズちゃんはおひめさまになりたかった」「どうしてならなかったの？」「うーん、それはね、おひめさまになりたい子が九人いたから」「そっかあ。それでどうやってお姫さまを決めたの？」「アミダくじ！　それで〇〇ちゃんと〇〇ちゃんがおひめさまになったの。あのね、キンタロウになりたい子はゼロだったんだよ。ゼーんぶくじできめていったの。それでね、キンタロウは〇〇くんと〇〇くんと〇〇くん、クマは……」

よどみなくたくさんの固有名詞が上がっていく。四歳の頭脳はまだやわらかくて透明だ。

西の端の方まで来て、腕からユズを下ろした。また手をつないで段差を上がっていくと、遊歩道の入口があった。「野鳥園」の案内板がかかっている、へえーっ、こんなところに、と思う。

「こっちの方に野鳥園があるんだって。鳥さんたちがいるよ。行ってみよう」「トリさんが？　なんで？」「鳥さんたちが来てくれるように、鳥さんたちのための公園を作っているんだよ」「どうぶつえん？」「うーん、動物園じゃないね。自然にいる鳥が来るところ」「スズメとか？」「スズメもね。もっと珍しい鳥も」

レンガ敷きの道のカーブのままに進むと、広い池の一部が見えてきた。ヨシが生え、水面は少しさざ波立っている。でも池に向かう正面が、小屋を半分だけ建てたようなもので高く横長にふさがれていた。入ると焦げ茶色に塗った木

造の壁で、中ほどにガラスのない長四角の窓がいくつか穿たれている。人はその中に身を隠して野鳥を観察せよということらしい。壁には季節ごとの野鳥を紹介するパネルもいくつか貼られている。

「ユズちゃん、この窓から鳥を見るんだって」「どうやって?」

窓は大人には腰を屈めるくらいの高さだが、小さな子供には高すぎる。「よし!」とまた抱っこしてやる。窓から少し頭を出してやると、落ち着かない格好で横を見、下を見ている。

「あ、カモが泳いでる! ほら、あそこ」「どこ?」「あそこ」

やや遠くの方で、番いなのかカルガモが二羽、泳いでヨシの陰に隠れていた。ほかに鳥はみえなかった。

頭を引っ込めて抱き取ってやると、ユズはなにを思ったか、両足を振り上げてどんと壁板を蹴った。そして声をあげて笑う。支えてやると、横なりになって垂直の壁を歩くように蹴り続ける。おもしろい遊びになった。一度下ろすと、また「だっこ」という。壁板横歩きの遊びは三回、四回と続いた。

少し離れた小高いところに公衆トイレがあって、屋根に鳥形を乗せていた。

「あそこにも鳥がいるよ、ほら、あのトイレの屋根」「え、あ、ほんまや! トリや」。そればかりかトイレ全体が鳥形に作ってあるようだ。「ユズちゃん、おしっこは?」「でる」

トイレの前に軽トラックが停まっただけでちょうど清掃中のような。入口あたりの床が一面水で濡れていた。女子トイレの方で清掃の音がしている。あたりを歩いている人もいないので、車椅子用の広いトイレのドアを開く。でもその床も便座も水びたしだ。足の置き場を気にしながらペーパーをたぐって、それで便座を拭い、パンツを下ろしたユズを抱き上げて座らせる。終わるとたたんだペーパーを渡してやる。

トイレの前の石のベンチに座って、ユズはまたボトルの水を飲んだ。私はコーラの残りを口に含み、汗を拭いた。気温はますます上がっているようだ。下の方を、同じように帽子をかぶりタオルを首にかけておばさんが二人、早足で通り過ぎていった。

またレンガの歩道に戻った。少し行くと数人の男が歩道の一部をはがして工事していた。制服のガードマンに誘導された。見ると右手はあのバーベキュー広場、その横が駐車場で、停めた自分の車も見える。それでV字のかたちに歩いているとわかった。左手には野鳥園の池面が広がっているはずだが、金網の向こうは木々や草が生い茂り、鳥たちを驚かさないように歩道とはだいぶ隔

てであるようだ。

やがて右手に、金網のフェンスの向こうに赤っぽいグラウンドが見えたが、誰もいなかった。その手前が公園らしい区画で、木々がまばらに植わっている。その木々はちようど、葉のあちこちから炎を噴き出すように深紅の花をたくさんつけていた。手前の木に近づくと幹にプレートがあった。

「ユズちゃん、この赤い花、きれいだねえ。そこに名前を書いてあるから読んでみ」「うーん、ア、メ、リ、カ、デ、イ、ゴ」「そう、アメリカデイゴというんだね。珍しい花だよ。豆の花だよ」「はな、とっついていい?」「ちよっと、もらおうか」

ユズは背伸びをして花茎を一つもぎ取った。見れば一つの花茎に二、三十も花がついている。一つ一つの花は、鷹の爪のような豆の莢を一枚の小皿のように開いた花弁が受けているかたちだ。すべて深紅だ。花茎の先の方はまだ菱形のつぼみだった。

プレートの「アメリカデイゴ」の文字の下に、「(海紅豆 かいこうず)」と小さく書かれている。それで、ああ、と私は思い出した。会社の駐車場の脇にこの木があった。その方は葉をうっそうと茂らせたかなりの大木で、毎年あでやかに深紅の房をいっぱい垂らした。花期は長く、次々に花がこぼれると下の駐車場のセメントの上が真っ赤になった。それはたしかに、いつも暑くなるころだった。珍しい、よい名だと、海紅豆とばかりおぼえていたが、アメリカデイゴともいうのだ。二つの木のようにすを比べればおもしろいぶ違うが、すると、この公園のはまだ若木たちらしい。

そのこの地面は、菅の類なのか、細長くやわらかそうなクリーム色の下草が生え放題になっている。踏み入ると草の迷路のようだ。ユズは自分の背丈ほどもある草をおもしろがってつかむ。引っ張ると、少し手に残った。それを私に投げつけてくる。私も草をちぎって投げつける。ユズは「やめてよ!」と笑いながら逃げる。追いかける。また草をむしって投げってくる。愛らしい声があったりに響く。幼児の声は、大人の庇護を求める赤ん坊の時の声質をまだ残しているものだ。

そうしているうちに、携帯にママから連絡が入った。

「ユズちゃん、そろそろ、リヨリヨの検査が終わるって。リヨリヨ、大丈夫だったって。よかったねえ。迎えに行こか」「うん」「おもしろかったねえ」「うん」「暑かった?」「あつかった」

アメリカデイゴと草の公園を出て、もとの道を引き返す。私はさつきもぎ取

った花を手に、時々公園の方を振りかえる。離れると、木々の花々はやはり噴き出す炎の群れのようだ。何かの意志を伝えるように。記憶しておこうと思っ
た。

ユズはつないでいた手を放して前に駆ける。腰が安定して、足の回転も軽く、
パパゆずりのなかなかの俊足だ。六月の光が明るい。

「仕事」の話

木曜日はユズの習い事の日だ。大阪のホテルに勤めているパパの周君が休み
でなければ、ユズは二時過ぎに幼稚園から帰ると、三時過ぎにはママとリョリ
ヨと三人で家を出る。車で五分もかからず私の家に立ち寄り、私が運転を代わ
って四人で道を下る。この都市によくある、山の中腹から海の方へと南下する
谷川沿いの道だ。

後部座席のユズは窓を開けて外を見ながら「ひよっこりひょうたん島」の歌
を口ずさむ。このごろ幼稚園の音楽会のために皆で練習しているらしい。私が
合せてワンフレーズ歌うと、

「え、ジッチャも知ってるの？」と驚く。

「五十年以上も前の歌だからねえ。ジッチャも子供のころによく歌ったよ。お
もしろい歌だねえ」

弟のリョリヨは紺色のキャップをかぶり、私の傍らの席の補助椅子にちょこ
んと座って道路の車を眺めている。車種の見分けについてはもう「年季」が入
っていて、このごろもママと凶鑑でよく見ているとかで、スポーツカーを中心
にますます詳しくなった。おもちゃのミニカーも古いのから新しいのからいっ
ぱい持っている。あ、ポルシェだ、フェラーリだ、GT-Rだ、とやっている。
今も、後で遊ぶつもりなのだろう、ミニカーを入れた赤い布袋を手から離さな
い。かなりの程度の車種音痴である私にはわからないが、その知識の頭で眺め
ていると、街なかにも案外スポーツカータイプの車がふつうに走っているらし
い。

川沿いの道を下り、片道二車線の国道に交差する所ではたいい赤信号で長
めに止められる。ちょうど正面の国道の右折ラインにフェラーリが一台入って

いるのが見えて、言うど、どれ？ どれ？ とリヨリヨが身を乗り出す。

交差点の周辺はこの時間帯にしてはかなりの人が歩いている。気持ちのいい秋の好天の午後のせいもあるのだろう。ただ、新型ウィルス感染症の流行が収まらない折から、ほとんどの人が窮屈にマスクをつけている。

「人が多いねえ。買い物帰り、学校の帰り、散歩の人もいるねえ。仕事帰りの人も」

そばでリヨリヨが「しごと？」と聞きとがめる。「そう仕事」。

青信号に変わって左折すると、ユズの習い事をする施設はすぐそこだ。車を左側に寄せて停めると、ママとユズがフープや紐やの新体操の道具を持って「バイバイ」と言いながら下りていった。二人ともいつの間にかマスクをつけている。リヨリヨもほんとうはここで下りてママといっしょにいたいのだが、前に二、三度そうしてみたところ、幼いので長時間はじっと座っていられずに走り回るのでママは閉口し、以来ユズの習い事の時間はバッチャジッチャが家で預かることになった。

すぐにまた発車させて、狭い道を左折する。JR線の低いガード下をくぐり、また左折してもとの川沿いの道に出る。

「しごとって、なに？」

私のしゃべった中の「仕事」という言葉が頭に残っていたようで、助手席のリヨリヨが訊く。このごろよく、自分に不明な言葉の意味を訊いてくるようになった。

「仕事」ってねえ、そうだねえ。パパは今、お仕事行ってるよねえ」

「うん、パパはー、おしごといった」

「はー」というところに力が入るしゃべり方だ。

「そう、パパみたいだねえ、大人はねえ、朝起きて、用意して、どこかに仕事をしに行くんだよ。お仕事をしたら、お金がもらえるんだよ。そういうもんだよ」

「こどもはー、おしごとしないん？」

「うん、子供はしないね。子供はお兄ちゃんお姉ちゃんになったら、学校に行くよ。まあ、それが子供のお仕事みたいなもんだねえ」

「でも、こどもはおカネもらえないん？」

「子供はもらえないねえ。ほんとのお仕事じゃないからねえ」

「おカネって、だいいなん？」

「うん、そう、お金は大事だねえ。お金がないと、スーパーへ行っても、何も

買えないよ。パンも、肉も、果物も……。みんなお金で買うねえ。お金がないと、食べ物が買えないねえ。食べ物が買えないと、困るよ、生きていけないねえ」

「おかしも？」

「そう、お菓子も買えない。ミニカーも」

「ふくも？」

「そう、服も帽子も」

「ジツチャはー、おとなだから、しごとしてるん？」

「うん、ジツチャはしてない。今はしてないよ。前はしてたけど、もう辞めた」

「仕事」とか「仕事を辞める」とか、抽象的すぎてリヨリヨにはわかりにくいはずだ。でもそう言うしかない。大人の言葉というのはよく虚空に浮動してしまつて落ち着かないものなのだ。

「しごと、やめたん？」

「うん。……リヨリヨ、今何歳？」

「三さい」

「リヨリヨがねえ、一歳の時まで、ジツチャも仕事してたんだよ」

「でももうやめたん？ としとったから？」

「そう、歳とつたから。ジツチャも長い間、仕事してたんだよ。リヨリヨもねえ、二十歳くらいになったら仕事するよ。仕事してお金かせぐんだよ」

「二十さい……」

どれだけ通じたか、おとなしくそばに座っている三歳半のリヨリヨはいくらかぼんやりしてきたようだ。今日は昼寝の途中で起こした、とさっきママが言っていた。川沿いの道はカーブが多い。揺られながらリヨリヨは、車の中でよく寝てしまう子だ。

ずっと坂道を上って山腹の家に着くと、リヨリヨはまたはつきりしてきた。板敷の居間でひとしきり私を相手に、わざわざ袋に入れて持参してきたミニカーの走らせごっこをした。お気に入り入りのスポーツカーをまっすぐ早く走らせることに熱中する。それから、車のトランクに入っている自分の自転車を出させて、バツチャと「コイさん」まで散歩に出た。活発なリヨリヨは自転車が得意で、ねえねのまねをしながら、三歳の誕生日の前からも補助輪なしの自転車を乗りこなすようになった。

家の前のわりあい広い道を横手に行くと、「道場」と呼ばれている仏教関係

の施設がある。段差のある広い敷地に建物も立つそばに、谷川の水を長いホースで引いてきて落とし入れている十五坪ほどの池があって、大きなコイが十数匹飼われている。稚魚や亀もいる。小道に沿って歩いて、通りがかりの人が適当にエサをやってもかまわない。

私が寝ころんで本を読んでいると、半時間ほどで二人は帰って来た。もうユズとママを迎えに行く時刻だ。石段を下りていくと、リヨリヨとバッチャが古い歯ブラシで車のタイヤの汚れをとっていた。リヨリヨは道具を使う遊びが好きだ。それもおもちゃでなく、本物の道具を使ったがる。たとえばノコギリで木の枝や板の切れはしを切りはじめるとなかなかやめない。

リヨリヨに訊くと、このままバッチャと家で待つのでなく、また車に乗ってママとねえねを迎えに行くという。前のドアを開けてやると、運転席から助手席の補助椅子まで、小さな身体でジャングルジムのように移っていく。

車の中でまたリヨリヨと二人になった。思えば日常でリヨリヨと私が二人だけになるのは、この行き帰りの時しかない。また坂道を下っていく。生まれた年が、世紀をまたいで六十五も違う二人が話しながら。

「リヨリヨ、今日、幼稚園に行ったん？」

「いった」

リヨリヨは四月から週二日、二時間ずつ、幼稚園のプレクラスに通うようになった。初めは幼稚園の門のところでもママと別れる時に激しく泣いたらしい。入りたくないと身体を使って抵抗もした。やっと部屋に入ってもそのまま二時間泣き通しだったり、ただ一つの椅子にしがみつくようにして座っているだけだったりという状態がしばらく続いたので、親たちも今年はもう止めさせようかと悩んでいた。それでも、時に休んだりしながら、何とか一学期間は続けた。そのころはまわりの大人たちがリヨリヨに幼稚園のことを訊ねても、何もしやべりたがらなかった。夏休みの後は少し慣れたか、また「赤ちゃん」ならぬ「お兄ちゃん」として無理にも自分を鼓舞したか、あまり泣かなくなった。少しずつ友だちとも遊ぶようになったらしい。それでもママによると、このごろでも朝、だいぶ行きぐずることもあるようだ。

「幼稚園で今日は何したん？ お絵かき？」

「おえかきはしない！」

「じゃあ、歌は歌った？」

「うん」

「どんな歌？」

こんな、と歌い出したのは、どうやら毎回クラスで歌う始めの時の歌と終わりの時の歌らしい。

「おしっこもいったよ」と言う。

「へえ」

三歳くらいはまだ、おしっこが大きな課題の一つだ。リヨリヨもまだ、寝る時にはおむつをしているはずだ。

園のクラスではどうもおしっこタイムをもうけているようで、その時は先生について希望者が連れ立っていくらしい。

「ハルくんも、〇〇くんも、〇〇ちゃんも、〇〇ちゃんも、いっしょにいったよ」

「へえ、みんなでいっしょにおしっこ、行くんだねえ」

「うん。ハルくんも、チンチンあったよ」

「ふうん、そう。あったんだねえ」

そんなふうにリヨリヨの口から次々に「おともだち」の名前が出てくるのを聞くのは初めてかもしれない。幼稚園の環境にだんだん慣れて、交わって遊んだり、習ったりしているとわかって一安心する。

しかしふと、こんな訊き方はどうなのか、と私は省みる。親たちをはじめまわりの大人たちが、幼な子に同じような質問を何度もして、園でのようすを聞き出したがっている。もちろんその子を心配してそうするのだが、幼な子の立場に立てば、大人たちに同じようなことばかり何度も聞かれるとうんざりするはずだ。そして無意識にも大人たちの下心に気づき、こんなふうに戻しておけば大人たちが安心すると、あるいはそれ以上ややこしく訊かれなくなると、経験的に知恵をはたらかせるようになる、その結果の「おともだち」の名前の列挙なのかもしれない。

大人がいつぱいやつてしまうことなのだろうが、そして幼な子にとってもそうした中でコミュニケーション術も身につけていくところがあるのだろうが、しかし結局幼な子に変に気を回させてしまうこんな訊き方は、ほめられたものではない。大人の要らぬ手出しの一つなのだ。ほどほどにすべきなのだ。放っておいても、子供はいずれ自力で自分の道を開いていくのだから。

ハンドルを握りながら、瞬間にそんなことが頭を過ぎった。

また国道の交差点の赤信号に近づいた。

「あ、ライナー！」

川の対岸に沿う高い桁の上を、JRの拠点駅と人工島の街とをつなぐ新交通

システムの自動運転の車両がゆっくりカーブしていくのを、リヨリヨは目を見開いて見上げている。

それぞれの街

大阪のホテルに勤めている娘婿の周君が、たて続けに腕と足を骨折した。まず、休日に友人の家に家族で遊びに行つてその家の活発な小学生と家の回りで鬼ごっこをしていた時、転んで左ひじの骨にひびを入れた。医者にかかり、一月ほどは左腕を固定して吊り下げておかねばならなくなった。その二週間後、その恰好で自宅の前の公園で三歳の息子を遊ばせていた時、階段で子供をかばおうとして無理な姿勢になり、左足の中ほどの小骨を折った。これも病院でやはり一月ほどはかかると言われ、家の中でトイレに行くのにも不自由なありさまになった。なんとか歩けるようになってからも、左腕と左足なので、はじめは松葉杖も使いかねた。

たて続けの不注意のケガで周君は気持ちを腐らせかけ、中国にいる母親にもスカイプで弱音を吐いていたようだ。でも向こうで看護師をしているその母親も、こちらの家族たちも、むしろ運よくこの程度のケガで済んだと思え、とか、めったにない長期休暇と考えよ、とか言つて慰めた。幼な子二人の世話と在宅の仕事をかかえ、ふだん買い物や料理をかなり夫に依存している私の娘も、しばらくの忍耐生活を覚悟し、近くに住む私たち老夫婦もふだんより助力するつもりになった。

周君はケガのたび、当然会社には連絡して、治癒するまで長期の休暇をとることになった。不幸中の幸い、とも言えないが、ちょうど世は新型コロナウイルス禍の最中で、ふだんは稼働率の高い勤め先のホテルもこのごろは閑古鳥が鳴き、自宅待機の日が増えている。本人も内心少し恐れたようだが、首切りになる心配はなさそうだった。

自宅での周君の生活にもさまざま不便や不都合がともなったが、その中の一つがバイクのことだった。彼はふだん、山の中腹の団地から最寄りの駅までバイクで下り、電車に乗り換えて通勤している。ところがしばらくそのバイクには乗れない。バイクは長期間放置すると自然放電でバッテリーが上がってし

まう。上がると動かなくなつて困る。そこで義父の私に、たまに自分のバイクに乗ってもらえないかと声がかかった。

去年の退職以来ずっと暇にしている私は、その日のうちに早速車で団地に出かけた。団地は私の家から西側へ谷筋を一つ隔てた高台にある。その駐輪場で待ち受けていた松葉杖の彼から運転の説明を受けた。バイクといってもありふれた原付スクーターだが、思えば私はバイクの運転から遠ざかってもう三十年以上にもなる。初めはどうスタートさせるのかさえも心もとない。だが、原付くらいならもう高校時代から乗っていたという自信が今もまったく残っていないわけでもない。数分間だけキーの操作や各種ボタンなどを教えてもらって、ヘルメットをかぶり、多少ふらつきながらなんとか五階建ての棟の前を走りだした。

その日は団地付近の道路で慣らす程度のつもりだったが、ガソリンがもう少しなくなっている。それに乗り始めて二、三分もすると、何ということもないと思えてきた。それで、長い坂道を下って街に下り、国道沿いのガソリンスタンドまで行ってみることにした。片道一車線の、市バスも通る長い坂道はおおよそ川に沿っている。その多くのカーブを曲がる時のバランス感覚がうまくつかめず、必要以上にゆっくりになる。また直線でも、車の場合とは違い、法定の三十キロで走っていても早すぎると感じられる。それで車にはもちろん、他の原付にも追い抜かれるが、追い越される時はナイーブになって左側に寄りすぎ、かえって危ない。

でも、なにか新しい感覚だった。昔ふつうに乗り回していたころの感覚は、もう身体が忘れてしまったようで戻ってこない。だからハンドル操作も、小さな車体に身体を乗せているのも、風を正面からまともに受けるのも、ほとんど新しい感覚だった。大げさにいえば、小さな機械の馬に命をゆだねている感覚も。

車の時よりはずっと気を使いながら、右折してなんとか片側二車線の国道に出て、セルフのスタンドでガソリンを入れることができた。左前のミラーの付け根がゆるんで用をなさないので、そのまま交通量の多い国道を走ってバイク屋を見つけ、レンチで直してもらった。右折して山手幹線まで上がり、川筋まで出て元の道を上った。そのころにはもうだいぶ慣れた感じで走れるようになった。団地に着いて周君にキーを返し、駐車場の自分の車に戻って携帯で妻に無事を告げた。

夕食の時、妻が冗談めかして、久しぶりにライダーになった感じはどうだっ

た？ と訊くので、新しい感覚だったと言った。でもその後、でもなあ、と言
い淀み、つなぐ言葉を探したがうまく見つけられなかった。でもなあ、「新し
い」と「新鮮」とは違う。何ごとに対しても新鮮に感じるということはあるな
いんだ、言いたかったのはそんな当たり前の、他愛ないことだったようだ。

バイクのバッテリーは、乗らずに放置しておくとして一日ごとに約一パーセント
ずつ自然放電する。電池量が減って電圧が規定値以下に下がるとエンジンがか
からない。バイクのトラブルで一番多いのがバッテリー上がりだ。走ってバッ
テリーを充電するには、二、三十分以上走行する必要がある、そうしたことを
ネットの記事で調べた。

二回目は一週間後の、雨が落ちてきそうな午後だった。団地の家のドアの所
でキーを受け取り、駐輪場に行つてバイクを引き出し、ヘルメットを被り、さ
てエンジンを始動しようとするが、どうしたことかいつこうにかからない。左
ブレーキをきかせながら、キーを何度もONに入れ直してみるが気配もない。
バッテリー上がりか？ それとも何か操作を忘れている？ 一週間前、周君に
教えられながらキックでかかったのをやっと思ひ出し、たどたどしくキックレ
バーを引き出して一蹴りするとようやくかかった。

どこかに用事があるわけでもないのにバイクを走らせるのは、ちょっと妙な
ものだ。バイク自身のバッテリーに充電するのが目的だから、どこを走っても
よいわけだが、その、どこ、が小問題だ。どこでもよい、の、どこ、とは、ど
こだ？ 原付スクーターではツーリングとしゃれこむわけにもいかない。

少し考えて、今回は簡便に近場で済ませることにした。また国道方面まで下
つたら、たとえば、昔、ちょうど私がバイクを下りたところに法改正で義務化さ
れた、広い道路での「二段階右折」がなんとなくやっかいだ。「右折のライトを
点滅させながら左端を通過して交差点に入り、その角で止まって向きを九十度変
え、向かいの信号が青になるのを待つ……」、それくらいはできるだろうが、面
倒だ。

団地よりさらに北側、山の斜面の上手の方に戸建ての住宅群が広がっている。
私の家からは、ふだん犬の散歩で、横手に歩いて谷川にかかった橋を渡ってよ
く行く所なので、道路のぐあいはよくわかっている。そこを適当に二、三周す
ることにした。カーブするバス道路を、アクセルをいっぱいふかして上る。今
朝も犬と歩いたコースだが、車道をヘルメットをかぶって三、四十キロのスピ
ードで上っていくと風景はまた違って見える。その住宅地が行き止まりになっ

ているので車量は少ない。ほとんど前後に車の姿のない長い坂の舗道のまん中を占め、風を切って少しだけライダー気分になる。しかしヘルメットごしに、タンタンタンタン……とバイク音がいかにもけたたましい。ふだん他人の乗るバイク音には慣れていているが、この自分が発する音はうるさすぎる。上りつめると、見晴らしのよい所で止まり、すぐスイッチを切る。窮屈なヘルメットもとって一息つく。

六甲山中腹の標高約三百メートルからの眺め。眼下に切れ目なく街が広がっている。東西に細長い神戸市の東部と、隣接する芦屋市のあたりだ。正面には人工島。視野の中の所々に高層マンションやホテルが筈のように立ち上がり、海辺には赤白のガントリークレーンが目立っている。曇天の下、海は灰白色で対岸もかすんでいるが、でもだからといって落胆などしない。高台から見るとこんな景色は、いろいろな天気や時間帯でもう飽きるほど見続けてきたのだから。このごろは自宅の窓や散歩道から国際港の船の出入りをよく眺める。定期不定期に大きなコンテナ船や自動車運搬船や貨物船、たまには客船が、東西に長い神戸港にいくつもあるバスにしきりに出入りする。その陸側の湾岸道路や高速道路は都市の動脈らしくひっきりなしに大型トラックやトレーラーが行き交っている。

山の際の静かな住宅地を二、三周も、目的地点もなく爆音をばらまきながら走るのは少し気が引ける。前方の犬を連れた人が振り返る。ふだんとは逆の立場だ。子供にもあまり近寄らない方がいい。

そこから下り、二十棟もある団地の周囲も一周して、娘家族の住む棟に戻った。足を引きずりながらも松葉杖なしにようやく家の中を歩けるようになった。周君にキーを渡す時、キックでしかかからなかったよ、バッテリーが弱いのかもしれないと言うと、周君はげんなり顔をして、そうですか？ 私がこの間ちよつとやってみたらかかりましたよ、お父さん、スターターのボタンは押ししましたか？ と訊く。ああ、そうだった、とそこでやつと気づく。右グリップのそばの赤いボタンがスターターで、キーはONに入れておいて、左のブレーキをかけながらそれをただ指でプッシュすればよかったのだ。前に聞いたはずなのになんとにぶい頭だ、といやになる。

その夜寝ながら、今度乗る時にはやはり下の街に出てみようと思った。今日のようなコースではあまり距離がかせげず、たいした充電にはならない。しかし気の進まない「二段階右折」、そう思い浮かべた時、にぶい頭が少し閃いた。そうだ、右折はせず、左折ばかりして走ればよいではないか、そうして一筆書

きで四角形を描くように行けば「二段階右折」はまったくする必要がないし、また一筆書きをうまく描けば、つまり、どこへでも行ける、ということだった。

翌日、世の中はシルバーウィークとかの四連休の初日だった。午前中、地元のある財団法人が施してくれる品物を、これは車で妻ともらいに行く。

この財団法人は戦後まもなく旧村の財産区を管理するために作られた法人で、今でも区内に土地を広く所有・管理していて地代収入も大きく財政は豊かしい。それで、珍しいことだが、地元への利益還元の意図なのだろう、毎年敬老の日に合わせて旧村の範囲に居住するすべての六十八歳以上の老人をイベントに招待する。イベントは音楽や芸能の催しだ。そして帰り際に祝いの品を渡してくれる。ウェブ記事によると、数え歳で古稀以上の老人が対象で、これは古く明治時代末から続いている年中行事なのだという。旧村内のざっと数千人もが対象らしい。有名人が来て歌や漫才を披露し、祝いの品がなかなかよくて地元で人気のあるイベントだと私も聞いていたが、今年初めてその案内状が私の所にも届いたのだった。案内状には、昨今の新型コロナウイルス禍のため、残念だが今年のイベントは中止する、でも例年のように祝いの品だけはさしあげる、とあった。ただ、祝いの品は配達してくれるのでなく、指定の日時・場所に受け取りに来るよう、というのだった。代理でもかまわないわけだが、どんなようすの行事なのかと私も妻も少し興味を起こした。受け取る品の中には、娘夫婦の家に回せるものもありそうだ。

指定された場所は国道2号線より南にある小学校で、車でそこに近づくにつれ、白い大きな紙袋を下げた老人たちの姿が目につくようになった。小学校の近くで私だけ車から下りて正門から入っていくと、集団の健康診断の拡大版よろしく、長いルートが作られている。ルートに沿ってたくさん立っているスタッフに明るい声をかけられながら導かれ、先の人の後について校舎の中を通り運動場に出ると、まん中に中型のトラックが数台止まっている。黄色の係に黄色の案内状を手渡すと白い紙袋がもらえた。ただし、スタッフも受け取る側も皆マスクをし、距離を保とうとするのであまり面と向かった感じがせず、終始人と人の間をすり抜けつつ校門から出されたぐあいだった。

白髪や灰色の髪や禿頭の多い、たくさんので元の男女の老人たちが四方からゆっくりこの小学校に集まり、そしてゆっくり四方に散っている。笑顔は少なく、声も乏しかった。それはマスクのせいもあるうが、生老病死、わが身に病苦や心労をかかえている人たちも中に多かるう。私もそろそろ例外でない。四

方の街にゆっくり散っていく老人たちは、紙袋を持ってそれぞれの住処に帰る。その住処は、中には豪邸もあるのかもしれないが、病院や老人ホームなのかもしれない。このご時世、独居の人も少なくなろう。この街で生まれ育った人も、途中から移ってきた人もいるだろう。多くはもうこの街の片隅でひっそり暮らしているのだろう、自分のように。

帰宅して紙袋から取り出してみると、丁寧に包装された祝いの品は、高級梅干し、グルメフーズ、せんべい、洋菓子、それに近くの温泉の招待券などだった。

棟の前に娘と孫たちがいて、公園に出かけるところだ、周君はスーパーに買い物に出かけたという。腕、足の痛みが治まり、動きがだいぶ回復してきた周君は、数日前からなんとか自分で車を動かせるようになった。

私の姿を見て、五歳のユズが二階の自宅から竹馬を持ち出してきた。来週の幼稚園の運動会のために、このごろよく練習しているらしい。母親によると、幼稚園での稽古でよく乗れるので、先生から紙にいくつも赤丸をもらったという。その鍛えた技を私にも見せたいようだ。竹馬の高めの両足に一回でうまく飛び乗ると、たしかにバランスよく歩く。スキップもして見せる。器用に後ろ歩きまでする。身体と竹馬が一体で、なかなか自在だ。姉に対抗して三歳のリョリョの方も、サッカーボールを得意げに蹴って見せる。ここではだめ、車に当たるでしょ、と母親に叱られている。ヘルメットを被って駐輪場からバイクを引き出してくると、三人に送り出された。

三度目ともなるとスタートも走行もスムーズになった。下り道のカーブも気にならない。追いついてくる車があつたら、少し端に寄りスピードをゆるめて先に行かせる。好天の秋の午後で、切り分けていく空気の感触が心地よい。

川沿いの道を下って、交差する国道2号線も突っ切って、さらに川沿いに海の方に向けて走る。突き当りの阪神電車の駅の手前で左折する。しばらく走ってまた左折する。ともかく左折する。

この間バイク乗りの四十代の友人が家に来た時、近ごろたまに原付に乗っているんだと話し、「二段階右折」の回避方法を思いついたと得意げに言いかけると、先に、ああ、左折をくり返すんでしょ、とこともなげに言われた。なんだ、バイク乗りには常識なのか、しょうもない、と私はしよげた。

その東側へ谷筋一つ隔てたところの高台の団地に住むその男は、原付バイクも持っているが、主には四百CCのバイクに乗っている。その時も休日に淡路

島をツーリングしてきたと、土産に玉ねぎエキスのスープの袋をもらった。彼は数年前までは車一辺倒でカーレースの熱烈なファンだったが、四十代になってバイクに開眼し、今も大型免許を取るために自動車学校に通っている。コロナウィルス禍は自動車学校にも大いに影響して、受講人数を制限している上に、オンライン授業のため時間を持て余している大学生たちがたくさん申し込むので、なかなか実技のコマが取れない、と嘆く。私はバイクの免許も持たず、ほぼ興味もないが、バイクの話はマニアの彼からだいぶ吹き込まれた。車とはまた違う快感がバイクにはあるのだ、と彼は主張する。彼の話につき合いながら、私は以前、昔の人は馬に乗った、武士などは名馬を持ちたがった、バイクは現代の馬なのではないか、と思いつきをしゃべったことがある。それでその時も、車とバイクの違い、それは馬車と馬の違いみたいなものか、と私は訊ねたが、笑って答えなかった。

今日も主目的はバッテリーの充電だが、もう一つ、今日はふだんあまり通らない道を走ってみようと思っていた。長年この都市に住んでいるといっても、通った道、行った所、知っている街区はひどく限られている。毎日のように高みから街を眺めているといっても、それは行ったこと、知っていることにはならない。

車だと道の細い街区には入りにくいのが、原付ならたいいの所に入りこめそうだ。漫然と無目的に走るより、この機会に、ふだんは行かない、もう二度と通ることはないかもしれない、この都市のいろいろな街区のようすを見て回ろう、という気になった。

左折をくり返していると車体は南の方に向いた。片側三車線で車量の多い国道43号線も難なく突っ切る。さらに南下するとやがて酒造会社や倉庫の並ぶ一帯に出た。岸壁のへりでいったん停まって、鈍色の海水をのぞきこんだ。そこから引き返し、また左折して北上し、街区に入りこむ。

生活道路らしい細い道をゆっくり走っていると、案の定、私にとって街は見知らぬ顔に満ちていた。知っている区画の方がまれだ。ああこんな所が、建物が、景色があったのか、と小さな驚きが続く。所々で止まり、異邦人よろしくあたりをぼうつと眺めまわす。小さな事業所があり、マンションの群れがある。狭いパーキングや医院がある。美容院や幼稚園も。若者が車を洗っている。住宅の前で親子がボールで遊んでいる。この辺は、建物のようにすからすると、二十五年前の震災で壊れ、多く建て替えられた地区のようだ。大きな風呂屋に入っていく家族連れがいる。結婚式でもあった後なのか、教会の敷地内で着飾っ

た子供たちが駆けている。――

神社のそばに小さな公園を見つけた。バイクを道路の脇に停めてヘルメットを片手に公園に入り、ベンチにかける。休日の午後で、たいてい近所の人たちなのだろう、人がやや多い。二、三の老人がベンチで休んでいる。小さな子供たちがブランコやすべり台に集まっている。そばにはマスクの母親たち。小犬を歩かせている人もいる。というふうに見えるだけなら、自宅の近所の公園と少しも変わらない風景だが、海も近い平地の街区の中の公園は空気も雰囲気もだいぶ違う。あたりにはビルや家が密集して、車の音に取り巻かれている。山の緑の代わりに、人々の暮らしの濃密なおいがある。

もし私がこのあたりの住人だったら、とふと思う。もし私がこのあたりに長年暮らしているのだったら、ふだん抱いてるこの都市の感触やイメージはだいぶ違ったものになっていただろう。ここより少し南の、海のそばに住んでいたなら、あるいはずっと西の方の繁華街に暮らしていたならまた違ったはずだ。当たり前なことだが、どこに住み、どのように暮らし、何を見て何を感じるか、どの学校に通い、どの通りや駅に馴染むかによって、街の感触もそこで送る人生の手触りも違ったものになる。街は一つだが、しかし一つでない。人それぞれの街なのだ。ベンチの老人にも、話に花を咲かせている母親たちにも、それぞれの街がある。

公園の一隅で小さな子供が父親から竹馬を教わっている。やっぱりここでも園の運動会が近いのかもしれない。幼い彼の中にもすでに彼なりのこの街が育っている。

背の高い公園時計が分を刻んでいる。退職後は高台から海を眺めるほか、空もよく仰ぐようになった。今、公園時計の上の空は白いうろこ雲と青空が半分ずつ住み分けている。中天の秋らしい濃い瑠璃色はまぎれもなく宇宙そのもので、見続けていると身体が浮き上がって吸い込まれていくようだ。もし反対に、あの瑠璃色の深みの方からこちらの方を眺めたなら……。廣大無辺の宇宙の中に、この街もこの星も、あるかなきかに浮かんでいる。

プラタナスの葉にあたる光が色づいてきた。周君から気づかいのメールが入る。立ち上がり、バイクに向かう。